

ヘボンとシモンズの生き方

大滝 紀雄

ヘボンは長老教会(プレスビテリアン)に属し、シモンズは和蘭改革派教会(ダッチリフォームド)に属したが、二人ともアメリカ人宣教師であり、かつ医師であった。ヘボンは医療のほか、ヘボン式ローマ字を創り、辞書の編纂、教会建設、聖書翻訳等幅広い活動をしたが、一生を宣教と伝道に過ごした。これに対してシモンズは宣教師を辞めたのちは、もっぱら医師として横浜市大病院の前身、十全医院で医療活動に身を挺した。

私は横浜開港資料館所蔵の『横浜 毎日新聞』『東京横浜 毎日新聞』明治三年十二月より十四年六月までの記事に眼を通したが、その中から興味ある事例について述べたい。

三代目沢村田之助が脱疽のため右足をヘボンにより切断手術を受けたのは一八六七(慶応三)年九月といわれる。重受の錦絵で知られるが反対意見もある。翌一八六八年三月東京で一本足で舞台を務めたことは『横浜新報』の「もしほ草」で有名である。ヘボンがアメリカカヘルフォの義足を注文し、これが日本最初の義足装着となったのは同年秋頃であろうか。病状が進み左足切断は一八六九(明治二)年で、周延の錦絵にもあるがこれにも異論がある。最初の切断後八年経った一八七五(明治八)年二月二十七

日大阪で、手も足もないダルマ男の田之助が、外眼つかいと身体、こなしでたつぷり芝居を演じ観客を喜ばせた記事が、明治八年三月八日の同紙に載っているのは興味深い。

ヘボンが好んで使用した硫酸亜鉛の点眼薬は岸田吟香により広く発売された。明治四年八月にすでに御めぐすりの広告が出ている。明治九年から十一年にかけては眼薬、精銻水、岸田吟香製と書かれ、ビンのラベルに「MEGUSURI」の横文字が見られる。価格は最初は一朱のち六銭となっている。明治十二年四月、五月、六月の三ヵ月の広告は平文先生渡来の点眼薬「試ルニ実効アルコト神ノ如シ是レ神氣水ノ名」として、精銻水は突然神氣水と変わり回生堂国井謹製となっている。ラベルの字は「SULPHA」硫酸に改められる。この広告はわずか十数回であとは再び精銻水に戻っている。

シモンズに関してヘボンより記載がはるかに多い。明治五年十月十四日横浜病院規則には、セメンズ診療、朝八時〜十時、日本人医師九時〜十二時とされている。六年七月二日、九日には解剖の必要性、脚氣病者の解剖が記されている。八年十一月十五日にはシモンズの臨床講義がある。十年七月より翌年までコレラ流行とこれに対する対策、十二年三月、横浜区医学講習会の記事、十二年八月、検疫委員、県地方衛生会会議、十三年八月六日、セメンズ十年近くの十全医院任期満了し、横浜谷戸坂上二六一番地で開業、日曜を除く午前八時〜十時となっている。医師としての活動が広範囲であったことが知れる。

(平成元年十月例会)